

プロムナード (Promenade)

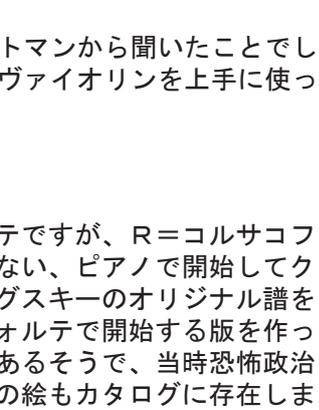
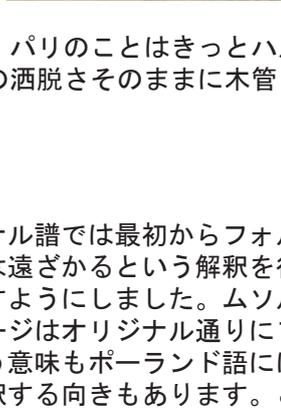
今度は威厳たっぷりに、肩をいからした感じの音楽になっています。最後は次の曲につながるように次第に萎縮させます。ラヴェルは再びトランペットを使用し、低弦のマルカートと共に絶妙な響きを作り上げます。



3. テュイルリー、遊びの後の子供たちの口げんか

(Tuileries, Dispute d'enfants apres jeux)

パリの中心部ルーヴル宮の前にあるテュイルリー公園で遊ぶ子供たちの口げんかを描写しています。この絵も確定されていませんが、ハルトマンがパリでデッサンした子供の絵を参考に掲載します。曲は忙しく活発に動き回る部分と優しく甘美な中間部（子供たちの口論するさまとそれを優しくたしなめる母親といった情景でしょうか。）からなり、ムソルグスキーの非常に洗練された作曲の腕を垣間見ることができます。フランス語を得意にしていたムソルグスキーは外国に出かけたことはないの、パリのことはきっとハルトマンから聞いたことでしょう。この手の曲の処理はラヴェルにとっては朝飯前、ピアノ曲の洒脱さそのままに木管とヴァイオリンを上手に使って粹な曲に仕上げています。



4. ビドロ (牛) (Bydlo)

ビドロはポーランド語で牛車のこと。ムソルグスキーのオリジナル譜では最初からフォルテですが、R=コルサコフが最初にピアノ譜を出版した際に牛車が遠くからやってきて最後は遠ざかるという解釈を行ない、ピアノで開始してクレッシェンドさせた後ディミニエンドしてピアノで終わらすようにしました。ムソルグスキーのオリジナル譜を知らないラヴェルはR=コルサコフに従っています。アシュケナーズはオリジナル通りにフォルテで開始する版を作っています。ビドロには他に「家畜のように虐げられた人々」という意味もポーランド語にはあるそうで、当時恐怖政治に苛まされていたポーランドの人々の憂鬱が秘められていると解釈する向きもあります。この絵もカタログに存在しませんが、ハルトマンの「ポーランドの反乱」という絵を関連付ける説があります。この曲の伴奏部はショパンの『葬送行進曲』に類似し、ラヴェルは避けることのできない宿命的なものを連想させる旋律をチューバによって重々しく描いています。

プロムナード (Promenade)

トランクイロで演奏される優しい表情の曲です。この曲も最後で次の曲への経過句を付加しています。



5. 卵の殻をつけた雛の踊り (Ballet des poussins dans leurs coques)

この絵はペテルブルグのマリンスキー劇場で上演されたバレエ『トリルビ』のための衣装デザインとして描かれたものです。チャイコフスキーの『眠りの森の美女』で有名なマリウス・プティパが振付けたフランスの小唄『トリルビまたはアージュの妖精』にもとづくものです。装飾音やトリルがふんだんに用いて、ひなどりの鳴き声と小刻みな動きを克明に描写した音楽になっています。

6. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (Samuel Goldenburg und Schmuyle)

この絵も特定されていて1曲に独立する2枚の絵が組み合わされています。ハルトマンがポーランドのサンドミールでスケッチした二人のユダヤ人を描いた絵で、彼らの会話を音楽にしています。まず、金持ちで傲慢なサムエル・ゴールデンベルクが話し始め、次いで貧しく卑屈なシュムイレが甲高い声で小言やら嘆き節を繰り返します。ムソルグスキーはユダヤ人ではなかったのですが、当時ロシアで虐げられていたユダヤ人に対して同情していたようで（彼の墓にはダビデの星が描かれている）、ヘブライの旋律にも詳しくとされています。ラヴェルは前者には弦楽器の力強いユニゾン、後者にはミュートを付けたトランペットを起用しています。



プロムナード (Promenade)

この曲の冒頭と同じテンポで演奏されます。ラヴェルはこの曲を省略しています。